⑤ トカゲ・ヤモリ・イモリ

細長い体に短い４本の足、長い尾。見かけは似ている３種ですが、トカゲとヤモリは爬虫類、イモリは両生類で仲間が全く違う上に、棲んでいる場所も行動様式もおよそ似たところがない生物です。しかし、いずれも広い意味での里地・里山生態系を指標する種であることから、今回はこの３種をまとめて調査の対象にしました。

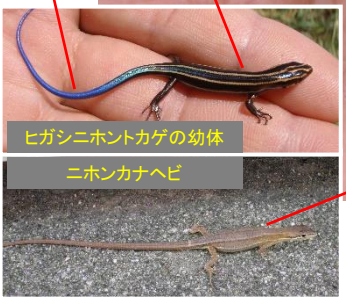
トカゲは土手などの草地に多い動物です。幼体は尾が青く、この色がトカゲの特徴だと思っている人も多いのですが、成体になると青い色は消えてしまいます。以前は日本本土のものはニホントカゲ１種にまとめられていたのですが、最近の研究の結果、東日本のものと西日本のものは異なる種であることが判明しました。愛知県のものは東日本系で、現在では「ヒガシニホントカゲ」と呼ばれています。人間がいないときには石垣の上などで日光浴をしていますが、驚くとすぐ逃げてしまいます。行動が敏捷なので、写真はやや撮影しにくいかもしれません。

ヤモリ（ニホンヤモリ）は、人家にすむ動物です。玄関灯のわきでじっと動かない影。まさに家の番人ですが、忍者のようにも見えます。トカゲと異なり、地上にいることはまずありません。動きは鈍いようですが、実際には警戒心が強く、驚くと結構敏捷に逃げてしまいます。写真を撮影する際には、驚かさないよう注意してください。

イモリ（アカハライモリ）は、池などの水たまりに多い動物です。ヤモリが家の守人なのに対し、こちらは井戸の守人です。背面は黒褐色であまり目立ちませんが、腹面は赤く、ちょっとびっくりします。動きはあまり速くありませんが、水中にいるので、そのままでは写真撮影がやや難しいかもしれません。捕まえて撮影した場合は、すぐに水中に戻してあげてください。

いろいろ違いがあるとはいえ３種とも親しみ深い生物ですから、多数の確認記録が集まるよう期待しています。特にヤモリは偶然の機会に確認されることが多く、専門家の意図的な調査が困難ですから、見かけた時には是非とも記録をお寄せください。

ヤモリのような人類依存型野生動物（シナントロープ）は、愛知県民の方の自然や生物の観察に資するようにするなら、本当はもっと触れたいところです。ニホンヤモリ以外でも、スズメ、ツバメは愛知県／日本における完全なシナントロープですし、アオダイショウやカラスは山野にも棲めますが、一部の個体（群）は人家や人里で人間と共存しています。いずれも観察しやすい動物ですし、環境指標生物でもあります。できればこのような動物についても、情報をお寄せください。



（上：豊田市，2013-9-10，矢部　隆）
（中：豊田市，2009-8-4，矢部　隆）
（下：豊田市，2014-7-11，矢部　隆）

ヒガシニホントカゲ　有鱗目　トカゲ科

Plestiodon finitimus Okamoto et Hikida

2012年に新種記載されたよく見るトカゲ

【 形　態 】
成体は背面が一様に茶褐色。4 月中旬～5 月中旬の交尾期に、オスには咽から腹にかけて橙色の婚姻色が表れる。幼体の背面は黒地に 5 本の黄色の縦縞が入り、尾は鮮やかな青色である。

【 分布と生態 】
本州の中部～東部、北海道、ロシアの沿海州。オカダトカゲが分布する伊豆半島や伊豆諸島にはいない。ニホントカゲとの分布の境界は、若狭湾から琵琶湖を経て南下し、中央構造線との交点からそれに沿って西に延び、紀伊水道に至る線。紀伊半島東部と南部にはヒガシニホントカゲが分布。

【 さがすポイント 】
春～秋の晴れた朝方に、開けた場所に日光浴に出てくる。

【 よく似た種 】
ニホンカナヘビ、ニホンヤモリ。

【 参考資料 】　県 GDB②p.A-30

DNA を用いた系統分類学的、生物地理学的研究により、東日本とロシア沿海州のものが新種ヒガシニホントカゲ（以下トカゲ）として、ニホントカゲから分割されました。

愛知に生息するトカゲ亜目の 3 種は棲み分けていて、ニホンヤモリは夜行性で、トカゲとニホンカナヘビは昼行性で地上性です。またトカゲは石垣や土手に、ニホンカナヘビは草地や灌木の周辺に多いです。

交尾期には、オスはメスを巡って頭をかみ合う闘争をします。メスは 5 月下旬～6 月中旬に石や倒木の下に産んだ 5～16 個の卵を、孵化するまで保護します。

（上：豊田市，2012-8-18，矢部　隆）
（下左：三重県，1995，矢部　隆）
（下右：豊田市，2017-8-16，矢部　隆）

ニホンヤモリ　有鱗目　ヤモリ科

Gekko japonicus (Duméril et Bibron)

人家や社寺に棲むので「家守／守宮」

【 形　態 】
全長 10～14cm、頭胴長 5～7cm で、頭胴長 8～10cm のヒガシニホントカゲや 6～9cm のニホンカナヘビよりもやや小さい。

【 分布と生態 】
本州、四国、九州、対馬。国外では朝鮮半島南部、中国東部。ただし日本のニホンヤモリは平安時代にアジア大陸部から移入された外来生物とする説がある。

【 さがすポイント 】
夏の夜、ガラス戸や網戸、柱や壁を歩き回り、灯りに集まる昆虫を採食する。ニホンヤモリとニホンカナヘビは素手か、先を少し曲げた金魚網で採集できる。

【 よく似た種 】
ヒガシニホントカゲ、ニホンカナヘビ。これら 2 種とは異なり、ニホンヤモリの四肢の指は円く広がっている。

【 参考資料 】
県 GDB②p.A-29

ニホンヤモリは完全な住家性で、人類依存型野生動物（シナントロープ）です。春～秋の暖かい夜には人間が点す灯りに集まる昆虫やクモ類を捕食します。人家や社寺、倉庫などの割れ目や隙間は、天敵を避ける格好のねぐらや越冬場所です。また 5 月～8 月上旬には、そのような狭い場所に 2 個の卵を接着して産みます。近年では、狭い隙間が少ない都市部の近代的なビルディングやマンションにも棲んでいます。

四肢の指下板には鉤状の細かな毛が密生していて、これを壁やガラスの凹凸に引っかけて垂直面や天井を歩くことができます。

（豊田市, 2016-5-7, 島田知彦）

アカハライモリ　有尾目　イモリ科

Cynops pyrrhogaster (Boie)

群なすイモリは豊かな湿地環境の証

【 形　態 】

全長9～13cm ほど。背面は黒色、腹面は赤からオレンジ色で、不規則な黒い斑紋がある。体表面には細かい隆起が密集する。

【 分布と生態 】

日本固有種で、本州、四国、九州に生息する。県内の丘陵地、山地には広く分布するが、平地域では著しく減少している。産卵期は4～7月上旬。

【 さがすポイント 】

池や水たまり、湿地などの水中にいる成体を網ですくう。

【 よく似た種 】

同目のサンショウウオ類とは、成体の形態は全く異なるが、幼生はしばしば混同される。

【 参考資料 】

県 RDB 動 p.208

水の中にすむイメージの強いイモリですが、実は幼生から変態した後の子イモリの時期には何年か陸上で生活します。このため、繁殖場所の周辺には、子イモリが生活できる湿潤な湿地や林床が必要です。イモリが生息している場所は、水域とその周囲の湿地環境の連続性が保たれた、豊かな環境と言えるでしょう。なお、知多、渥美半島のイモリは、背面の模様などに独特な特徴を持ち、「渥美種族」として県内の他個体群から区別され、県指定希少野生動物にも指定されています。両半島でイモリを見かけた場合には県担当課までご一報ください。